

# 携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響<sup>1)</sup>

## ——パネル調査による因果関係の推定

赤坂 瑠以

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

坂元 章

お茶の水女子大学

本研究では、小学生から高校生までの450名を対象に2時点でのパネル調査を行い、携帯電話の使用が友人関係の深さと密着性に及ぼす影響について検討した。分析の結果、携帯電話の使用が友人関係の深さに及ぼす影響では、有意な効果が見られず、密着性に及ぼす影響では、いくつかの変数で有意な効果が見られたことから、携帯電話の使用が友人関係の深さに及ぼす影響は大きなものとは言えないが、密着性に及ぼす影響はある程度認められることが示唆された。校種別に見ると、高校生では、虚構の心理的一体感、情緒的依存が高いほど、密着性が増加すること、中学生では、インターネット量、真実の心理的一体感、情報伝達、情緒的依存が高いほど、密着性が低下することが示され、小学生では有意な結果は見られなかった。さらに、友人関係が携帯電話の使用に影響するという逆方向の関係を示す結果もいくつか得られ、密着性と虚構の心理的一体感や情緒的依存との間に、互いを高め合う循環的な関係があることが示唆された。

キーワード：携帯電話、友人関係、子ども、パネル調査、因果関係

### 問 題

今日の日本では、携帯電話の普及、発展が著しい。電気通信事業者協会(TCA)の統計によると、2007年1月末時点の携帯電話契約数は9531万5200件であり、固定電話の契約数を凌いでいる。とりわけ若者の携帯電話保有率は高く、世代別に比較すると、10代の携帯電話保有率は95.7%と、全ての世代で最も高いことが報告されている(浅井, 2005)。Kamibepu & Sugiura (2005)等の研究では、日本の若者にとって、携帯メールは生活

の中で大きな役割を占めていることが指摘されている。

日本では諸外国の携帯電話産業とは異なる独自の技術発展が展開されており、カメラ機能、インターネット機能、ワンセグ、お財布携帯など、多機能化の方向に向かっている。しかし携帯電話の基本的機能は、通話やメールといった人と人とのつながりを媒介することである。そのため、携帯電話は対人関係において影響力を持つと考えられる。中でも、若年層の利用者は、携帯電話、特に携帯メールを、友人とのコミュニケーションを主目的として使用しており(上別府・杉浦, 2002)、若者の携帯電話の使用はとりわけ友人関係に影響を及ぼすと考えられる。

### 青年期の友人関係に関する研究

従来の青年期の友人関係に関する研究では、青

1) 本研究は、NTTDコモモバイル社会研究所のご協力を得て、同研究所が企画・監修する「モバイル社会白書2006」に関わる調査の一環として行われた。ここに記して感謝の意を表すものである。

年は友人との情緒的なつながりを求め、その緊密な相互交渉のうちに自己理解や自己形成に取り組むことで、社会性が発達し、アイデンティティが確立されていくとされてきた (e. g., 西平, 1973; Atwater, 1992) が、近年では、こうした緊密化とは逆の希薄化の傾向も指摘されている (e. g., 小此木, 1984 ; 千石, 1985 ; 岡田, 1995)。緊密化とは、友人と精神的な繋がりを持ち、本音で関わることができ、信頼感で結びついた深い友人関係を持つこととされており、希薄化とは、友人と深く関わることを避け、互いに傷つかないように深入りせず、浅い友人関係を築こうとすることという。

青年期の友人関係の特徴に関する研究では、その緊密性を指摘している研究が見られる一方、希薄性を指摘した研究も見られており、一貫した知見は得られていない。そのことを踏まえて、長沼・落合 (1998) は、現代の青年期に見られる友人との付き合い方を可能な限り多種類検出した後、2次因子分析を行って、そうした多様な友人関係から、さらに潜在的な変数を抽出することによって、青年期の友人関係の特徴を整理している。その結果、友人関係に関する136項目は16の下位尺度に分類され、2次因子分析の結果、「深い-浅い」という次元と、「密着-分離」という次元に分類された。「深い-浅い」の次元は、「お互いの内面を積極的に開示していこうとするつきあい方」に正の負荷を示し、「内面的なつながりに対する防衛的・閉鎖的なつきあい方」に負の負荷を示す両極から構成されている。また、「密着-分離」の次元は、「互いの個別性についての自覚が薄く、相手との心理的距離をできるだけ小さくし、相手の近くにしようとするつきあい方」に正の負荷を示し、「相手との心理的距離を大きくとって離れていようとするつきあい方」に負の負荷を示す2極を両極とすることが示された。また、この2因子は、直交解による因子であるため、互いに独立した2次元と考えられる。このように、長沼・落合

(1998) では、現代青年の友人関係をボトムアップ式に検討した結果、「深い-浅い」を対極とする「つきあいの深さ」に関する次元と、「密着-分離」を対極とする「密着性」に関する次元という2次元が見出されたといえる。

#### 携帯電話と友人関係との関連に関する研究

友人関係における「深い-浅い」と「密着-分離」という2次元は、友人関係の深さと心理的距離という、互いに独立した次元であり (長沼・落合, 1998), これらに関連したことは、携帯電話の使用に関することからも指摘されている。

まず、携帯電話の使用と友人関係の深さに関する研究としては、主に、友人関係の希薄化、緊密化が論じられてきた。携帯電話が若者に普及し始めた1990年代後期頃は、携帯メールに熱中する若者が街頭などで多く見られるようになり、そのような若者は、対面コミュニケーションを行う機会や意欲が減少し、現実社会の他者との付き合いが希薄化したり、人と触れ合うことで発達していく社会性の発達が妨げられるのではないかという懸念から (山下, 2001), 対人関係の希薄化の問題がしばしば論じられてきた。しかし、実証研究では、携帯電話の使用と友人関係の希薄性との正の相関は認められず、逆に携帯電話の使用と、友人関係の緊密性との正の相関が認められた (e. g., 中村, 1999 ; 辻・三上, 2001 ; 足立・高田・雄山・松本, 2003)。希薄性とは、友人関係が浅いということである一方、緊密性とは、友人関係が深いということであり、希薄性の対極をなす概念と考えられるため、この両極の概念は、長沼・落合 (1998) の「深さ (深い-浅い)」という概念に近いものと考えられる。

一方、携帯電話の使用と友人関係の密着性との関連も指摘されている。携帯電話の普及は、「いつでもどこでも」友人と気軽にコミュニケーションを取ることを可能とした。その結果、携帯電話の使用がさかんな若者は、離れていても携帯メールで友人と絶えずコミュニケーションを取り合い、

心理的に誰かと24時間一緒にいることを求めるような関係になっているとされ、このような人間関係は「フルタイム・インティメート・コミュニティ」と呼ばれる(仲島・姫野・吉井, 1999)。「フルタイム・インティメート・コミュニティ」は、いつでも相手とつながっている状態であることで、安心感を抱くような密着した関係であるが、反面、自分の送信したメールに、相手からの返信がなかったような場合には、相手とのつながりが感じられなくなり、不安や不信、孤独感を招きやすくなる(上別府・杉浦, 2002)。辻(2006)は、携帯メールの利用頻度と孤独不安とが、正の相関を示すことを確認しており、携帯メール利用と孤独不安が互いを促し合うような関係にある可能性が指摘されている。また、携帯メールでのやり取りは、自発的なやり取り以外に、相手との関係を損なわないために、義務的に行われる場合もある(上別府・杉浦, 2002)。このような友人関係は、自分と相手との個性や他関係の距離を保つ意識が低いものであり、いかにすれば相手と密着した人間関係といえる。

これらの先行研究をまとめると、携帯電話の使用と友人関係の深さ、密着性との関連では、携帯電話の使用が友人関係の浅さと正に相関するという結果はなく、逆に深さとは正に相関するという結果が得られており、また、密着性との正の相関も認められているといえる。ただし、先行研究では、携帯電話の各種機能の使用量と友人関係との関連を検討したものが多く、各種機能の使用の内容といった質的側面と友人関係との関連を検討した研究はほとんど見られない(浅井, 2005; 赤坂・高木, 2005)。浅井(2005)の事例研究では、携帯電話の使用量に併せて、使用の内容との関連についても検討した結果、使用の内容により、携帯電話が友人関係を緊密化させる側面と、逆に、希薄化させる側面とが認められた。すなわち、緊密化の側面として、携帯メールでのコミュニケーションで、暇つぶしやちょっとした気持ちのやり

取りを行うと、それを足がかりにすることで、対面コミュニケーションがより円滑になり、その結果、緊密な友人関係が築かれる可能性が指摘されている。その一方で、希薄化の側面として、「用件だけのメール」のやり取りをすることにより、必要なときはすぐにメールで連絡がとりあえるという手軽さや安心感が得られるために、対面でのコミュニケーションの必要性を感じにくくなり、対面コミュニケーションが減少し、友人関係が希薄化する可能性が指摘されている。このように、携帯電話の使い方の違いにより、友人関係は深くなるだけでなく、逆に浅くなる可能性も考えられるため、各種機能の使用量に併せて、使用の内容が、友人関係を浅くするか、逆に深くするか、さらには、密着化をもたらすかについても検討する必要がある。

携帯メールの使用の内容については、赤坂・高木(2005)で、友人との本音のやり取りである「真実の心理的一体感」、嘘の気持ちであっても友人関係を維持するためにやり取りを行う「虚構の心理的一体感」、暇つぶしやちょっとした気持ちの伝達である「情緒的依存」、必要な用件のみのやり取りである「情報伝達」の4つに分類されている。赤坂・高木(2005)は、携帯電話の使用が友人関係の希薄性と関連していないことを示した諸研究の一つであり、本研究は、赤坂・高木(2005)の知見を踏まえ、友人関係の深さと密着性という観点から検討を行うため、この4つの分類を取り上げ、これらのメールの内容が、友人関係の深さと密着性に及ぼす影響を検討する。

従来の研究では、携帯電話の通話量やメール量と友人関係との関連を検討する相関研究が多いが、相関研究では、因果関係を推定することが難しい。そもそも因果関係を推定することには、原因となっている変数を操作することによって、結果を変えることができる可能性があるため、因果関係を検討する社会的意義は大きい。したがって、相関関係の検討に留まらず、因果関係を明らかにす

る必要がある。さらに、携帯電話の使用と友人関係とが、互いに影響し合う循環的關係にある可能性もありうる。影響關係を検討することは重要であるにもかかわらず、パネル調査など、その推定を可能とするような手法を用いた研究は、松尾・大西・安藤・坂元(2005)による携帯電話の使用と選択的友人關係に関する研究以外、ほとんど見られていない。

また、先行研究では、従来携帯電話の使用がさかんであった高校生・大学生を対象とした研究が多く見られるが、それ以外の年代を対象にした研究や、発達段階間に見られる影響力の違いを検討した研究は見られない。今日の日本では携帯電話所持の低年齢化が進んでおり、小学生、中学生でも携帯電話を使用する傾向が強まっている。三菱総合研究所の調査では、小学生の約3割、中学生の約6割が携帯電話を保有していることが報告されている(村上・前田, 2006)。したがって、青年期だけでなく、それより若年の層までを研究の対象とし、発達段階ごとの影響關係の比較を行うことが必要と考えられる。発達段階間の影響關係に関する比較はいまだ見られないものの、村上・前田(2006)は、携帯電話の使用状況の比較を行っている。その結果、小学生では保護者との連絡を目的に使用することが多いが、中学1年生でも、小学生同様、塾・習い事に通い始めるため、親との連絡手段として使用することが依然多く、この年代までは、携帯電話の使用が友人關係に及ぼす影響はあまり大きくないと予測される。しかし、中学2、3年生になると、友人とのやり取りを目的に使用するような変化が見られ、さらに、高校生では友人とのやり取りが中心となるため、友人關係に及ぼす影響は高まると考えられる。これらのことから、携帯電話が友人關係に及ぼす影響は、小学生より中学生のほうが強く、中学生より高校生のほうが強くなることが予測される。

#### 本研究の目的

そこで、本研究では、小学生から高校生までの

発達段階を対象に、2時点でのパネル調査を行い、携帯電話の使用が友人關係の深さと密着性に及ぼす影響について検討を行うことを目的とする。特に次の2点の仮説について検討を行う。

(1) 携帯電話の使用は、友人關係を深めるだろう。ただし、先行研究において、「用件だけのメール」のやり取りをすることと希薄性との關係が認められていることから、「用件だけのメール」にあたる「情報伝達」での使用は、友人關係を浅くするだろう。

(2) 携帯電話の使用は、友人關係の密着性を高めるだろう。

なお、先行研究において携帯電話の使用状況に発達段階差が認められていることから、上記の(1)および(2)の仮説の傾向にも、発達段階差があると考えられる。そこで、その傾向について小学生、中学生、高校生の発達段階間の比較を行う。また、友人關係が携帯電話の使用に影響するという、仮説とは逆方向の因果關係についても検討し、携帯電話の使用と友人關係の間に循環的な影響關係があるかについての検討も併せて行う。

## 方 法

### 分析方法とモデルの適合度判定

本研究では、2時点でのパネル調査を行い、交差遅れ効果モデル(Cross-lagged effect model)を用いた構造方程式モデル分析を行った(Figure 1)。このモデルを適用することで、同時点の2変数間の關係も考慮し、仮定されている2つの影響關係を同時に検討することができる。また、本研究では、小学生、中学生、高校生を対象にしており、これら複数の母集団間の比較を行うため、これら3グループに関して多母集団同時分析を適用した。

例えば、Figure 1に基づく分析の結果、小学生において1時点目の携帯電話の使用量が2時点目の友人關係に及ぼす効果が有意であれば、小学生で携帯電話の使用量が友人關係に影響を及ぼして

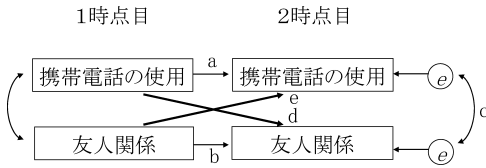


Figure 1 携帯電話の使用と友人関係の分析モデル

Table 1 分析モデルの等価制約

モデル	等価制約	DF
Model 1	a, b, c, d, e	10
Model 2	a, b, c, d	8
Model 3	a, b, c, e	8
Model 4	a, b, c	6
Model 5	a, b, d	6
Model 6	a, b, e	6
Model 7	a, b	4
Model 8	a	2
Model 9	b	2
Model 10	なし	0

いと推定できる。逆に、1時点目の友人関係が2時点目の携帯電話の使用量に及ぼす効果が有意であれば、友人関係が携帯電話の使用量に影響を及ぼしていると推定できる。

多母集団同時分析では、複数のグループ間において同一モデルの検証と比較を同時に行うために、等価制約を導入する。本分析においては、Table 1 に示した 10 の分析モデルによる制約を導入した。これらのモデルは、Figure 1 で示した 5 本のパス (a-e) において、a-e の全てのパスが小学生、中学生、高校生の 3 グループで全て等しいと仮定した Model 1 から、3 グループで全てのパスが異なると仮定した、制約のない Model 10 までのモデルを意味する。

なお、モデルの適合度判定には、適合度指標として、 $\chi^2$  値、NFI (Normed Fit Index), CFI (Comparative Fit Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation), AIC (赤池の情報量基準) を用いた。慣例として、 $\chi^2$  値は値が小さいほどモデルがデータに適合していることを意味しており、

$\chi^2$  値の有意確率が .05 以下であればモデルは棄却される。ただし、 $\chi^2$  値は標本数に影響されやすく、標本数が少ないほどモデルが棄却されにくい性質を持つため、標本数との兼ね合いを見て判断する必要がある。また、AIC の値が最も低く、かつ、NFI と CFI の値が .90 以上、RMSEA の値が .05 以下のときに、そのモデルはデータによく適合していると判断される (豊田, 1998)。

調査時期と被調査者

質問紙は Web を用いて配布、回収を行い、2005 年 11 月および 2006 年 1 月に、全国の小学校 5 年生 - 高校 3 年生を対象に 2 時点でのパネル調査を行った。調査は、株式会社インフォプラントが所持する約 370,000 名 (10 代 -60 代) の調査対象者の中から、本研究の対象に該当する年齢の人と、対象に該当する年齢の子どもを持つ人に調査の案内を送付し、質問紙に対する回答を求めた。その結果、回答が得られた小学生・中学生・高校生は、1 時点目 900 名 (男子 43.3%, 女子 56.7%, 小学生・中学生・高校生, 各 300 名), 2 時点目 450 名 (男子 42.4%, 女子 57.6%, 小学生・中学生・高校生, 各 150 名) であった。なお、2 時点目の回収は、小学生・中学生・高校生, 各 150 名が集まったところで打ち切った。これは、回収期間を短くすることによる利点が大きいと考えられたためである。すなわち、もし調査の回収期間を長くした場合、サンプル数は増えることが予測されるが、サンプルによって、調査の間隔に違いが生じるという欠点が生じる。そこで、回収期間を約 2 週間と区切ることにより、間隔のばらつきが生じることを防ぐことが可能となる。これにより、間隔のばらつきには対処できたが、早く回答した被調査者は、携帯電話への関心が高いなどの何らかの特性を持っており、サンプル・バイアスが生じている可能性が危惧される。そこで、2 時点とも回答を行った対象者のサンプルが偏っているかどうかを確認するために、1 時点目のみ回答した 450 名と、2 時点とも回答した 450 名の変数に

ついて、*t*検定による比較を行った。その結果、全ての携帯電話使用量、メールの内容、友人関係の変数において有意な差は認められず、もともとの900名の被調査者の中での一般性には問題はないものと考えられる。また、Schmidt (1997)、Webster & Compeau (1996) 等では、Web調査にはサンプル・バイアスが生じることが指摘されており、この900名がもともとITリテラシーが高い方向に偏っている可能性も考えられるが、この問題を踏まえた検討については後述する。

### 調査内容

1時点目、2時点目ともに同一内容を同一質問項目で尋ねた。

#### 携帯電話に関する項目

1) 携帯電話所持率 「1：持っている」、「2：持っていないがほしい」、「3：持っていないしほしくない」の3肢択一で回答を求めた。

2) 携帯電話使用量 通話量、メール量、インターネット量について、数値をカテゴリー化した6から9段階の尺度を用いた。すなわち、通話量（「1：0秒」、「2：1秒-5分未満」、「3：5分-10分未満」、「4：10分-30分未満」、「5：30分-60分未満」、「6：60分以上」の6件法）、メール量（「1：0通」、「2：1-4通」、「3：5-9通」、「4：10-14通」、「5：15-19通」、「6：20-29通」、「7：30-39通」、「8：40-49通」、「9：50通以上」の9件法）、インターネット量（「1：0秒」、「2：1秒-1分未満」、「3：1分-5分未満」、「4：5分-10分未満」、「5：10分-30分未満」、「6：30分以上」の6件法）のそれぞれについて回答を求めた。

3) メールの内容 メールの内容に関する尺度として、赤坂・高木 (2005) の「携帯メールの内容」に関する項目、計10項目を使用した。「真実の心理的一体感」(2項目)、「虚構の心理的一体感」(3項目)、「情緒的依存」(3項目)、「情報伝達」(2項目)のそれぞれについて、「1：全く当てはまらない」、「2：あまり当てはまらない」、「3：

少し当てはまる」、「4：とても当てはまる」の4件法で回答を求めた。

**友人関係に関する項目** 友人関係の深さ、密着性に関する尺度として、長沼・落合 (1998) の「友達とのつきあい方に関する尺度」から下位尺度を抜粋して使用した。友人関係の深さに関する項目としては、「深さ（深い-浅い）」の下位尺度である「ありのままの自分を出している」因子の中から4項目、「悩みの相談をする」因子の中から5項目、「相手を信じている」因子の中から5項目、「傷ついても本音でつきあおうとする」因子の中から5項目、「相手に頼ろうとしない」因子の中から5項目（この因子は逆転項目として扱った）、「深いつながりを持つ友人は作らない」因子の中から6項目（この因子は逆転項目として扱った）、「目的に応じて相手を変える」因子の中から5項目（この因子は逆転項目として扱った）、密着性に関する項目としては、「分離-密着」の下位尺度である「嫌われないように気をつけている」因子の中から7項目、「共通体験で結びついている」因子の中から6項目を抜粋して使用した。それぞれについて「1：全く当てはまらない」、「2：あまり当てはまらない」、「3：少し当てはまる」、「4：とても当てはまる」の4件法で回答を求めた。

## 結 果

### 携帯電話の保有率と使用量

全被調査者のうち携帯電話を保有しているものは569名(63.2%)、非所持者のうち、「持っていないがほしい」は275名(30.6%)、「持っていないしほしくない」は56名(6.2%)であった。校種別では、小学生で29.7%、中学生で65.3%、高校生で94.7%が保有していた。三菱総合研究所 goo リサーチ (2006) が小学生-高校生2,129名を対象に行った「子どもの携帯電話利用状況」に関する調査によると、小学校4年-6年では21.1%、中学生では49.5%、高校生では94.2%が携帯電話を保有

**Table 2** 各種使用量の中央値・平均値・SD

	全体		小学生	
	1 時点調査	2 時点調査	1 時点調査	2 時点調査
通話量	2 2.16 (1.33)	2 2.12 (1.26)	1 1.41 (0.80)	1 1.47 (0.86)
メール量	2 2.76 (2.15)	2 2.89 (2.29)	1 1.35 (0.83)	1 1.39 (0.89)
インターネット量	1 2.40 (1.82)	1 2.39 (1.75)	1 1.16 (0.59)	1 1.20 (0.69)
	中学生		高校生	
	1 時点調査	2 時点調査	1 時点調査	2 時点調査
通話量	3 2.09 (1.30)	2 2.05 (1.22)	3 2.99 (1.31)	2 2.84 (1.25)
メール量	2 3.03 (2.46)	2 3.23 (2.58)	4 3.91 (1.93)	4 4.05 (2.14)
インターネット量	1 2.27 (1.76)	1 2.29 (1.67)	4 3.77 (1.75)	4 3.69 (1.69)

注. 各調査の中央値, 平均値, SD の順に示す。括弧内は標準偏差を表す。通話量, インターネット量は 6 件法の得点, メール量は 9 件法の得点を表す。

していることが示されている。また、サーベイリサーチセンター (2006) の調査によれば、小学校高学年では 33.3%, 中学生では 62.5%, 高校生では 95.3% が保有していることが示されており、今回の結果は、それらの先行調査の中間に位置している。先述のように Web 調査にはサンプル・バイアスが生じることが指摘されていたが、本調査の結果は、上記の 2 つの調査結果と比較して、両調査の結果の中間に位置することから、本調査の対象者は一般に比べ、それほど逸脱しているとは考えにくく、本研究で得られた結果にバイアスによる影響は生じていなかったと思われる。

また、携帯電話の各種機能別の使用量について、通話量, メール量, インターネット量の中央値, 平均値, 標準偏差を求めたところ、Table 2 のようになった。ここに見られるように、平均値は小学生, 中学生, 高校生の順に、通話量, メール量, インターネット量のいずれにおいても増加する傾向があった。また、1 時点目と 2 時点目において、顕著な差は見られなかった。

さらに、小学生, 中学生, 高校生の 1, 2 時点目ごとの各変数 (通話量, メール量, インターネット量, 真実の心理的一体感, 虚構の心理的一体感, 情報伝達, 情緒的依存) 間の相関係数と再検

査信頼性係数を算出した (Table 3~Table 6)。

次に、影響の分析に先立ち、メールの内容について、1, 2 時点目ともに回答した 450 名のデータに基づいて、それぞれの項目の得点を合計し、尺度得点を算出した。なお、項目分析により、情緒的依存に含まれる 1 項目を分析から除外した。1, 2 時点目それぞれの項目間の相関は、「真実の心理的一体感」の項目 8 と 10 で、.60, .66 ( $p < .01$ ), 「虚構の心理的一体感」の項目 5 と 7 で、.37, .41 ( $p < .01$ ), 項目 5 と 9 で、.33, .30 ( $p < .01$ ), 項目 7 と 9 で、.23, .40 ( $p < .01$ ) (「情緒的依存」の項目 1 と 4 で、.38, .56 ( $p < .01$ )) 「情報伝達」の項目 2 と 3 で、.45, .48 ( $p < .01$ ), であった (Appendix 1 を参照)。

また、友人関係の深さ, 密着性についても、450 名のデータに基づいて、項目の得点を合計し、尺度得点を算出した。なお、項目分析により、合計 6 項目を分析から除外した。各尺度における 1, 2 時点目の Cronbach の  $\alpha$  係数は、「深さ (30 項目)」で .91, .91, 「密着性 (13 項目)」で .86, .85 であった (Appendix 2 を参照)。

#### 分析モデルの選択

Table 1 で示したように、Model1 から Model10 までの分析モデルについて、適合度指標を参考に

Table 3 各変数間の相関 (全体)

	通話量	メール量	インターネット量	真実の心理的一体感	虚構の心理的一体感	情報伝達	情緒的依存	深さ	密着性
通話量	(.72**)	.60**	.53**	.53**	.44**	.46**	.51**	.08	-.07
メール量	.58**	(.87**)	.61**	.50**	.51**	.30**	.61**	.07	-.02
インターネット量	.54**	.62**	(.84**)	.72**	.71**	.58**	.78**	.03	.02
真実の心理的一体感	.50**	.57**	.77**	(.72**)	.63**	.69**	.82**	.19**	-.01
虚構の心理的一体感	.42**	.59**	.72**	.69**	(.71**)	.63**	.74**	-.16**	.08
情報伝達	.38**	.34**	.61**	.70**	.60**	(.69**)	.52**	-.07	-.07
情緒的依存	.49**	.69**	.80**	.81**	.77**	.52**	(.78**)	.12**	.11*
深さ	.04	.07	.03	.15**	-.14**	-.04	.06	(.78**)	-.11*
密着性	-.02	.07	.07	.02	.16**	-.04	.15**	-.12*	(.55**)

注. 下段は1時点目の値, 上段は2時点目の値, 括弧内は再検査信頼性係数の値を示す。\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$   $n=450$

Table 4 各変数間の相関 (小学生)

	通話量	メール量	インターネット量	真実の心理的一体感	虚構の心理的一体感	情報伝達	情緒的依存	深さ	密着性
通話量	(.66**)	.74**	.42**	.44**	.38**	.36**	.45**	-.03	-.01
メール量	.69**	(.79**)	.65**	.53**	.64**	.41**	.69**	-.12	.07
インターネット量	.35**	.65**	(.53**)	.82**	.85**	.57**	.92**	-.02	.13
真実の心理的一体感	.36**	.65**	.92**	(.54**)	.78**	.77**	.91**	.02	.10
虚構の心理的一体感	.33**	.75**	.75**	.79**	(.54**)	.77**	.88**	-.12	.14
情報伝達	.35**	.64**	.66**	.82**	.85**	(.54**)	.66**	-.09	.07
情緒的依存	.35**	.71**	.90**	.83**	.87**	.69**	(.69**)	-.05	.17*
深さ	-.13	-.10	-.03	-.07	-.14	-.15	-.07	(.69**)	-.08
密着性	.09	.21*	.11	.08	.21*	.15	.18*	-.06	(.44**)

注. 下段は1時点目の値, 上段は2時点目の値, 括弧内は再検査信頼性係数の値を示す。\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$   $n=150$

Table 5 各変数間の相関 (中学生)

	通話量	メール量	インターネット量	真実の心理的一体感	虚構の心理的一体感	情報伝達	情緒的依存	深さ	密着性
通話量	(.67**)	.48**	.52**	.56**	.35**	.47**	.50**	.33**	-.09
メール量	.53**	(.85**)	.58**	.43**	.39**	.26**	.52**	.18*	.01
インターネット量	.55**	.53**	(.77**)	.71**	.73**	.61**	.80**	.12	-.09
真実の心理的一体感	.45**	.51**	.79**	(.68**)	.61**	.74**	.82**	.34**	-.07
虚構の心理的一体感	.33**	.52**	.71**	.71**	(.60**)	.55**	.76**	-.06	.06
情報伝達	.40**	.26**	.68**	.80**	.59**	(.59**)	.55**	.13	-.14
情緒的依存	.46**	.63**	.80**	.83**	.76**	.55**	(.73**)	.19*	.03
深さ	.24**	.21*	.10	.21**	-.07	.11	.16*	(.78**)	-.22**
密着性	-.07	.04	.05	.00	.12	-.15	.16*	-.18*	(.61**)

注. 下段は1時点目の値, 上段は2時点目の値, 括弧内は再検査信頼性係数の値を示す。\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$   $n=150$



Table 6 各変数間の相関（高校生）

	通話量	メール量	インターネット量	真実の心理的一体感	虚構の心理的一体感	情報伝達	情緒的依存	深さ	密着性
通話量	(.61**)	.47**	.23**	.15	.11	.11	.18*	-.03	-.03
メール量	.33**	(.80**)	.31**	.14	.23**	-.18*	.38**	.10	-.02
インターネット量	.17*	.41**	(.77**)	.38**	.33**	.16*	.51**	.05	.22**
真実の心理的一体感	.15	.20*	.46**	(.49**)	.16*	.31**	.60**	.32**	.09
虚構の心理的一体感	.03	.27**	.41**	.29**	(.55**)	.30**	.44**	-.31**	.22**
情報伝達	-.05	-.09	.22**	.33**	.24**	(.55**)	.04	-.19*	.01
情緒的依存	.13	.49**	.58**	.57**	.52**	.06	(.65**)	.26**	.31**
深さ	-.02	.04	.04	.32**	-.25**	-.09	.09	(.83**)	-.05
密着性	-.11	-.04	.04	-.07	.23**	-.08	.10	-.07	(.58**)

注. 下段は1時点目の値, 上段は2時点目の値, 括弧内は再検査信頼性係数の値を示す。\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$   $n=150$

各モデルを比較検証した。分析モデルの比較は、14通りの変数の組み合わせごとに行った。14通りとは、7（携帯電話の使用：①通話量、②メール量、③インターネット量、④真実の心理的一体感、⑤虚構の心理的一体感、⑥情報伝達、⑦情緒的依存）×2（友人関係：①深さ、②密着性）である。また、モデルの比較の際には、3グループ全てのパスを等価にし、Table 1に示したように制約をはずしていくという組み合わせの他に、3グループのうち、1グループのパスのみを独立とし、それ以外の2グループのパスを等価にし、制約をはずしていくという組み合わせのモデルでも検討した。なお、携帯電話を持っていないと回答した対象者の携帯電話通話量、メール量、インターネット量は、0秒ないし0通に置き換え、メールの内容は、「全く当てはまらない」に置き換えた。各モデルで示されたAICの数値を検証した結果、14通りの全てにおいて、10のモデルの中でModel 10が最も低い値を示していたため、Model 10を採用した。なお、採用したモデルは、飽和モデルであるため、 $\chi^2$ 値は0であり、モデルの適合度は、RMSEAは算出されず、NFI=1.00、CFI=1.00であった。Model 10は、小学生、中学生、高校生の3グループで全てのパスが異なるということを示したモデルであり、次に、このモデルにおける各グループのパス係数の値を検証した。

### 携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響の推定

携帯電話の使用が友人関係の深さ、密着性に及ぼす影響を検討するため、Model 10における小学生、中学生、高校生の各グループのパス係数の値を検証した(Table 7, Table 8)。

分析によって得られた標準化係数を、まず友人関係の深さについて見ると、小学生、中学生、高校生の全てで、有意なものは見られなかった(Table 7)。また、密着性については、小学生では有意なものは見られず、中学生では、インターネット量、真実の心理的一体感、情報伝達、情緒的依存が高いほど、密着性が低下するという結果が得られた。さらに、高校生では中学生とは反対に、虚構の心理的一体感、情緒的依存が高いほど、密着性が増加するという結果が得られた(Table 8)。

### 友人関係が携帯電話の使用に及ぼす影響の推定

次に、逆方向の因果関係について検討した(Table 7, Table 8)。友人関係の深さについては、分析によって得られた標準化係数によれば、小学生では有意な結果は見られず、中学生では、友人関係の深さが深いほど通話量が多くなるという結果が得られた。また、高校生では、友人関係の深さが深いほど情緒的依存が増加し、虚構の心理的一体感、情報伝達が低下するという結果になった(Table 7)。

Table 7 携帯電話と友人関係の深さとの影響関係

		校種		
		小学 生	中学 生	高校 生
通話量	(通話量→深さ) (深さ→通話量)		.17**	
メール量	(メール量→深さ) (深さ→メール量)			
インター ネット量	(インターネット量→深さ) (深さ→インターネット量)			
真実の心理 的一体感	(真実の心理的一体感→深さ) (深さ→真実の心理的一体感)			
虚構の心理 的一体感	(虚構の心理的一体感→深さ) (深さ→虚構の心理的一体感)			-.16*
情報伝達	(情報伝達→深さ) (深さ→情報伝達)			-.19**
情緒的依存	(情緒的依存→深さ) (深さ→情緒的依存)			.13*

注. 上段は携帯電話→友人関係, 下段は友人関係→携帯電話の有意な効果が見られた標準化パス係数を示す。標準化パス係数の値が正の場合, 各因子に対して携帯電話使用が正の効果を持つことを表し, 負の場合, 負の効果を持つことを表している。

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

また, 密着性についても小学生では有意な結果は見られなかった。しかし中学生では密着性が高まるほどメール量が増加し, 高校生では虚構の心理的一体感と情緒的依存が増加するという結果が得られた (Table 8)。

さらに, 高校生の虚構の心理的一体感と情緒的依存は, 密着性に影響を与えるとともに, それから影響を受けてもおり, 循環的な関係があることが示唆された (Table 8)。

## 考 察

本研究では, 2つの仮説について検討を行った。そこでまず, それぞれの仮説に関する全体での知見と考察を述べ, 次に, 小学生, 中学生, 高校生別の知見と考察を述べる。

### 仮説の検討

本研究での1つ目の仮説は「携帯電話の使用

Table 8 携帯電話と友人関係の密着性との影響関係

		校種		
		小学 生	中学 生	高校 生
通話量	(通話量→密着性) (密着性→通話量)			
メール量	(メール量→密着性) (密着性→メール量)			.09*
インター ネット量	(インターネット量→密着性) (密着性→インターネット量)			-.13*
真実の心理 的一体感	(真実の心理的一体感→密着性) (密着性→真実の心理的一体感)			-.16**
虚構の心理 的一体感	(虚構の心理的一体感→密着性) (密着性→虚構の心理的一体感)			.20**
情報伝達	(情報伝達→密着性) (密着性→情報伝達)			-.17**
情緒的依存	(情緒的依存→密着性) (密着性→情緒的依存)			-.14* .20**
				.19**

注. 上段は携帯電話→友人関係, 下段は友人関係→携帯電話の有意な効果が見られた標準化パス係数を示す。標準化パス係数の値が正の場合, 各因子に対して携帯電話使用が正の効果を持つことを表し, 負の場合, 負の効果を持つことを表している。

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

は, 友人関係を深めるだろう。ただし, 先行研究において, 『用件だけのメール』のやり取りをすることと希薄性との関連が認められていることから, 『用件だけのメール』に当たる『情報伝達』での使用は, 友人関係を浅くするだろう」であった。分析の結果, 小学生, 中校生, 高校生の全てで, 有意なものは見られなかった。このことから, 仮説は支持されず, 携帯電話の使用が友人関係の深さに及ぼす影響は, 全般的に弱いものと考えられる。

2つ目の仮説は「携帯電話の使用は, 友人関係の密着性を高めるだろう」であった。分析の結果, 中学生では, インターネット量, 真実の心理的一体感, 情報伝達, 情緒的依存が高いほど, 密着性が低下するという結果が得られ, 高校生では, 虚構の心理的一体感, 情緒的依存が高いほど, 密着性が増加するという結果が得られた。それ以外においては有意な結果が得られなかった。これらの

ことから、携帯電話の使用は単純に密着性を高めるのではなく、その影響には、中学生と高校生で違いが見られることが示唆された。

そこで次に、携帯電話の使用が友人関係の深さと密着性に及ぼす影響について、小学生、中学生、高校生別の知見と考察を述べる。なお、以下では有意な結果がより多く見られた高校生、中学生、小学生の順に見ていく。

#### 高校生における携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響

高校生では、虚構の心理的一体感、情緒的依存が高いほど、密着性が増加するという結果が見られた。虚構の心理的一体感は、友人関係を維持するために、自分の本心を隠して相手に合わせ、取り繕うようなやり取りであり、そうしたやり取りを多く行うことが、友人に嫌われないように気を使って相手に合わせながら付き合っていく密着性を高めるということは、妥当な結果と考えられる。また、情緒的依存が密着性を増加させることについても、友人からメールが来ないとき、寂しさを感じたり、ちょっとした気持ちのやり取りを多く行なうという情緒的依存が、密着性を高めるという結果は、妥当な結果と考えられる。

また、高校生では逆方向の因果関係も示唆され、虚構の心理的一体感および情緒的依存が密着性を高め、密着性が虚構の心理的一体感および情緒的依存を高めるという循環関係も示唆された。虚構の心理的一体感および情緒的依存が密着性を高めることについては前述したが、逆方向の因果関係、すなわち、密着性が虚構の心理的一体感や情緒的依存を高めることについては、長沼・落合(1998)で、友人との心理的距離は高校生頃に最も近くなることが指摘されている。したがって、この段階では、密着性が強く、嫌われないように気を遣うようなつきあい方を行う傾向があると考えられ(長沼・落合, 1998)、こうした友人関係の特徴により、密着性が、嘘の気持ちであってもやり取りを行う虚構の心理的一体感や、ちょっとし

た気持ちのやり取りである情緒的依存を促し、循環関係が成立しているのではないかと考えられる。

#### 中学生における携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響

次に、中学生では、インターネット量、真実の心理的一体感、情報伝達、情緒的依存が高いほど、密着性が低下するという結果が見られた。

インターネット量が密着性を低めることの一つの説明としては、インターネットは、通話やメールなどのコミュニケーションを目的として利用されるものとは違い、サイトを閲覧したり、着メロをダウンロードするなどの一人で楽しむことを目的として利用されるものである。したがって、インターネットを多く使用することで、友人と密着する機会より、一人でインターネット利用を楽しむ機会が増える結果、友人との密着性が低下する可能性が考えられる。ただし、本研究では、インターネットの使用の目的については検討していないため、どのような内容のインターネット使用が密着性を低下させるのかについては、今後、検討する必要がある。

また、中学生では、真実の心理的一体感、情報伝達、情緒的依存が密着性を低めることが示唆された。真実の心理的一体感とは、メールで友人と本音でやり取りを行うことであり、時には意見の対立やけんかをしてでも自他の個別性を開示しあうことで、深い関係を築いていくことである。一方、密着性は、自他の個別性に対する意識が保てていない状態で、密着した関係を持つことである。したがって、真実の心理的一体感のやり取りをすることは、密着した状態では行いにくいいため、真実の心理的一体感が高いほど、密着性が低下するのではないだろうか。また、情報伝達は、用件のみのやり取りであるため、密着性を低下させるのではないかと考えられる。さらに、中学生では、高校生とは反対に、情緒的依存は、密着性を低下させることが示唆された。通常、情緒的依存は密着性を増加させるように見えるが、中学生におい

て、逆の傾向が見られたのは、一つの仮説として以下のように考えられる。すなわち、中学生と高校生を比較すると、中学生では密着性がまだ十分に発達していない(長沼・落合, 1998)ため、密着の欲求はもともと大きなものではなく、密着したいと感じたとき、携帯メールで情緒的依存のメールのやり取りを行えば、その行為により密着したいという欲求が満足され、その欲求が消失するのではないだろうか。このように、携帯メールでの情緒的依存が密着の代償となるため、情緒的依存が高いほど、密着性は低下する可能性が考えられる。

総じて、中学生に見られたこれらの結果は、仮説とは逆方向の結果であり、高校生において見られた結果とも逆であった。このことから、発達段階の違いにより、携帯電話の使用の影響が異なる可能性が考えられるが、先の仮説を含め、この点について、今後検討する必要があると考えられる。**小学生における携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響**

小学生では、総じて有意な効果が見られなかった。これは、小学生では、中学生、高校生に比べて携帯電話保有率が低いことや、携帯電話の使用目的において、中学校、高校生では、友人とのやり取りが主な目的であるのに対し、小学生では保護者とのやり取りが主な目的であるとされていることから(村上・前田, 2006)、友人との携帯電話の使用そのものが少ないため、影響力が小さかったのではないかと考えられる。ただし、携帯電話保有の低年齢化は今日ますます拍車がかかっているため、今後の普及につれて、小学生にもより強い影響が見られるようになる可能性が考えられる。したがって、今後も小学生、中学生といった低年齢層への影響を検討していく必要があるだろう。

#### 今後の課題

本研究では、携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響について検討を行ったが、いくつかの課題

が挙げられる。まず、中学生で、インターネット量が密着性を低下させることが示唆されたが、インターネットのどのような使用が友人関係に影響を及ぼすのかについて、使用内容ごとに検討していくことが必要と考えられる。

また、本研究では、携帯電話の使用が友人関係の深さと密着性に及ぼす影響を示したが、示された影響がどのようなルートを通して、なぜ生じるのか(例えば、インターネット使用量が、対面コミュニケーションの機会を減少させる結果、友人関係の密着性を低下させる等)についてのメカニズムについては明らかにされていないため、この点について、発達段階の違いを踏まえて解明していくことが望まれる。

最後に、本研究で見られた結果は、2ヶ月の間隔をあけて見られた短期的な影響関係であり、そうした短期間でも携帯電話の影響があることを示したものである。しかし、今後、長期的影響を検討していくことも必要であろう。

このような課題は残されているものの、本研究は、携帯電話の使用が、友人関係の深さと密着性に及ぼす影響について因果関係を推定した点において、また、広範な調査対象者を対象に、発達段階による影響力の差異を検討した点において意義があると考えられる。

#### 引用文献

- 足立由美・高田茂樹・雄山真弓・松本和雄(2003). 携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係 関西学院大学文学部教育学科教育学科研究年報, **29**, 7-14.
- 赤坂瑠以・高木秀明(2005). 携帯電話のメールによるコミュニケーションと高校生の友人関係における発達の特徴との関連 パーソナリティ研究, **13**, 269-271.
- 浅井亜紀子(2005). 携帯電話による対人関係の親密化過程への影響: 女子大学生の認識とその背景 Caritas, **39**, 80-91.
- 浅井直樹(2005). 暮らし モバイル社会研究所(編) モバイル社会白書 2005 モバイル社会研究所 pp. 16-17.

- Atwater, E. (1992). *Adolescence*. 3rd ed. New Jersey: Prentice Hall.
- 上別府圭子・杉浦仁美 (2002). 携帯eメールが思春期の対人関係に及ぼす影響——首都圏5公立中学校における実態把握—— 安田生命社会事業団研究助成論文集, **38**, 48-57.
- Kamibeppu, K., & Sugiura, H. (2005). Impact of the mobile phone on junior high-school students' friendships in the Tokyo metropolitan area. *Cyber Psychology & Behavior*, **8**, 121-130.
- 松尾由美・大西麻衣・安藤玲子・坂元 章 (2005). 携帯電話使用が友人数と選択的友人関係志向に及ぼす効果の検討 パーソナリティ研究, **14**, 227-229.
- 三菱総合研究所 goo リサーチ (2006). 「子どもの携帯電話利用状況」に関する調査結果 報道発表資料, 108. (<http://research.goo.ne.jp/Result/000256/>) (2007年3月15日)
- 村上文洋・前田由美 (2006). 暮らし モバイル社会研究所 (編) モバイル社会白書 2006 モバイル社会研究所 pp. 58-59.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方から見た青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47.
- 中村 功 (1999). 電話コミュニティ——その実態とコミュニケーションの重層性について—— 松山大学論文集, **11**, 327.
- 仲島一郎・姫野 桂・吉井博明 (1999). 移動電話の普及とその社会的意味 情報通信学会誌, **16**, 79-92.
- 西平直喜 (1973). 現代心理学叢書 7 青年心理学 共立出版
- 岡田 努 (1995). 現代青年の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 小此木啓吾 (1984). モラトリアム社会のナルシスたち 朝日出版社
- サーベイリサーチセンター (2006). 子どもの携帯電話の利用について  
([http://www.surece.co.jp/src/research/mobile/pdf/jishu\\_42.pdf](http://www.surece.co.jp/src/research/mobile/pdf/jishu_42.pdf)) (2007年3月15日)
- Schmidt, W. C. (1997). World-Wide Web survey research: Benefits, potential, problems, and solution. *Behavior Research Methods, Instruments & Computers*, **29**, 274-279.
- 千石 保 (1985). 現代若者論——ポスト・モラトリアムへの模索—— 弘文堂
- 豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析<入門編> ——構造方程式モデリング—— 朝倉書店
- 辻 大介 (2006). つながりの不安と携帯メール 関西大学社会学部紀要, **37**, 43-52.
- 辻 大介・三上俊治 (2001). 大学生における携帯メール利用と友人関係——大学生アンケート調査の結果から—— 平成 13 年度情報通信学会大会個人研究発表配布資料
- Webster, J., & Compeau, D. (1996). Computer-assisted versus paper-and-pencil administration of questionnaires. *Behavior Research Methods, Instruments & Computers*, **28**, 567-576.
- 山下まいこ (2001). なぜ生身の人間と付き合えないの? 子どもと健康, **66**, 26-27.

## The Effect of Mobile-Phone Use on School Children's Friendship: An Examination of Causality with a Panel Study

Rui AKASAKA<sup>1</sup> and Akira SAKAMOTO<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

<sup>2</sup> Ochanomizu University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16, No. 3, 363-377

In the present study, we conducted a panel study of 450 elementary, junior high, and senior high school students, in order to examine the influence of mobile-phone use on two aspects of their friendship: depth and dependence. Results of data analysis showed that the more junior high school students use mobile phone, the less dependence and attachment in their friendship. The reverse was true for senior high school students: more phone use meant more dependence and attachment in their friendship. No similar effect was observed for the depth and intimacy aspect. Results of comparisons between age groups indicated that junior high school students were most strongly affected by mobile-phone use as a whole, and at the same time, it was suggested that there would be some reciprocal relationships between use of e-mail and dependence.

**Key words:** mobile phone, friendship, children, panel study, causality

### Appendix 1 メールの内容の項目内容

---

#### 質問項目

---

##### 真実の心理的一体感

- 8 私は、友だちからのメールには、いつも本音（ほんね）で答えている。
- 10 私はメールで、自分の本心を伝えている。

##### 虚構の心理的一体感

- 5 メールでは、うそをつくことがある。
- 7 メールは、自分の本心を見せなくてすむ。
- 9 メールでは、相手に賛成していなくても、相手に合わせてとりつくろうことがある。

##### 情報伝達

- 2 メールのやり取りでは、情報伝達に関係ない絵文字や言葉は、なるべく使わない。
- 3 メールでは長々としゃべらずに、用件だけを的確に伝える。

##### 情緒的依存

- 1 もしメールが一日中、誰からも入らなったら、さみしい感じがすると思う。
- 4 ちょっとしたことがあったとき、ともだちにメールで聞いてもらうことがある。
-

## Appendix 2 友人関係の項目内容深さ

## 質問項目

## 深さ

- 2 ありのままの自分の姿で、友だちと接している。
- 10 友だちには自分の気持ちを素直にあらわすことができる。
- 27 友だちにはありのままの自分を隠している。(R)
- 47 友だちには本当の姿を見せないようにしている。(R)
- 48 何でも話せる友だちがいる。
- 3 友だちには自分の悩みを聞いてもらえる。
- 11 友だちとは互いに悩みを相談しあっている。
- 19 友だちは自分の悩みの相談にのってくれる。
- 35 互いに何でも話せる友だちが、何人かはある。
- 4 決して自分を裏切らない何人かの友だちがいる。
- 12 何があっても、友だちのことは信じられる。
- 20 友だちとは、いつもいっしょにいても分かり合えている。
- 28 自分の友だちは信頼できる人たちだ。
- 36 友だちなものだから、いっしょにいる時間が少なくても気持ちは通じている。
- 13 お互いにショックなことがあっても、友だちとは本音でぶつかりたい。
- 21 少しくらい傷ついても、友だちとは本当の姿を見せあいたい。
- 37 友だちと本音で語り合うことで傷つくのは嫌だ。(R)
- 29 傷つくくらいなら、友だちとは本音で話したくない。(R)
- 46 本音を語り合って傷つくことがあってもかまわない。
- 14 友だちには頼りたくない。(R)
- 22 友だちに対して素直に甘えるということができない。(R)
- 38 友だちに甘えることができる。
- 15 友だちとは深く関わらないようにしている。(R)
- 23 友だちとはその場限りのつきあいが多い。(R)
- 31 自分の友だちの多くは、その場限りの友だちである。(R)
- 39 友だちというより、一人でいる方が気楽でいい。(R)
- 43 友達がなくても十分に一人で生きていける。(R)
- 25 何をしようとするかによって、つきあう友だちを変えている。(R)
- 33 その場その場にふさわしい友だちと、いっしょにいるようにしている。(R)
- 41 その時その時で、つきあう友だちを変えている。(R)

## 密着性

- 9 友だちを傷つけていないかと気になる。
- 1 友だちに嫌われないように行動している。
- 18 嫌われないかと心配しながら友だちとつきあっている。
- 26 友だちに嫌な思いをさせないように、気をつかっている。
- 34 まわりの友だちみんなに合わせようとして気を使っている。
- 42 自分が友だちから嫌われていないかどうかいつも気にしている。
- 45 周囲と合わせるようにしている。
- 16 共通の秘密があるからこそ、友だちづきあいが深まって行く。
- 24 友だちとは、いつもいっしょにいないとうまくやっていけない。
- 32 自分たちだけの秘密を、友だちと共有できていることが嬉しい。
- 40 友だちと自分は、共通の秘密を持っていることで結びついている。
- 44 いつもいっしょにいないと、お互い分かり合えない。
- 49 お互い分かり合うためには、いつもいっしょにいることが必要だ。

注. (R) は逆転項目